

●第十八回新選組書展の課題について

課題①「誠」

新選組の袖章や隊旗などに使われた、新選組を象徴する一文字。例年の課題です。

課題②「願書差出供奉之処願立候」

今回の「候文」の課題は、近藤勇が京都の様子と自らの考えを記した書状「京都当節之形勢」からです。書状の原本は残っていませんが、多摩の門人によって書き写されたと考えられるものが現存しています。

書状の前半部では、天誅の嵐が吹き荒れ、治安が大いに悪化している京都の様子を記していますが、後半では、幕府が攘夷をいつまでたつても実行しようとしなため、幕府・会津の下を離れて攘夷の先鋒となる軍を編成しようとしているという中川宮の下に入れてもらおうと考えていると述べ、焦りといら立ちを募らせている様子が感じられます。

課題文は前後と合わせて「中川宮様に赤心（嘘偽りの無い忠義の心）をもって『願書を差し出し、お供させていただけられるようお願いする』こともあるかもしれない」と述べている部分です。

当時の近藤が尊王攘夷の実現と幕府への忠勤との間で心が揺れ動いている様子がうかがえ、近藤勇の思想・信条の変遷がうかがえる書状となっています。



【大意】

京都当節之形勢

7月26日に三条大橋西詰にさらし首があり、天誅と称してその罪状を示す板が掲げられていました。

(中略)

その後も毎日のようにさらし首があります。ちょうど松平春嶽様も上京されるようで、西本願寺に滞在されるようですが、それに対して近隣に残らず放火するという犯行予告が貼られ、町人たちは恐れおののいています。

(中略)

攘夷については7月中旬に中川宮様から宮中に願書を提出されましたが、その趣旨はまず軍兵を募り、自ら先鋒を志願し攘夷を実行したいという嘆願であったそうです。

幕府が攘夷を実行しないためこれも仕方のないことです。

公卿・皇族に優れた方々が多いとはいえ、英雄・豪傑を采配する将としては中川宮様が最も相応しく、下々の我々も感服しています。

軍を指揮する準備の情報様が漏れてきていることから、中川宮様に關する伝聞については事実で間違いないようです。

もし宮様の先鋒が許可されたならば、我々もお供したいので、嘘偽りの無い忠義の心をもって「願書を差し出し、お供させていただけるようお願いする」こともあるかもしれません。

もし宮様の軍に採用されたならば、関東に下ることにもなるでしょう。

他にも細かい話は色々ありますが、まずは大まかなお話を申し上げます。

右のように、京都の形勢やよからぬ話を申し上げます。日本中の悪人どもが大挙して事件を起こしており、全く騒がしいことで、大変よくないことです。



【翻刻】
京都当節之形勢

抑七月廿六日、三条大橋西詰ニ御用場制札相懸り候設場有之、其所ニ首ヲ相掛、罪之次第は如左ニ記シ有之、粗写取申所、如此

右は、奸吏板倉周防・水野和泉等之相与シ、其許状ヲ受、砲台築達ヲ名トシ、富商ニ立入、大金ヲ貪リ候罪、天地不可許之、依之、可加天誅者也
亥七月

右之通認、首之上ニ板ニ書記シ、ツリ下ケ御座候事、見物之人數袖を連ね、甚以騒々敷事而已ニ御座候、其れ日々一ツ二ツ之鼻首も御座候て書記ニ不違、將又頃日松平春嶽様御上京も有之候由之処、西本願寺御旅宿ニ相成管之処、世風ニ甚要説御座候趣は、若春嶽様御旅宿も可仕所置も有之処は、不殘放火仕候由書付杯諾方ニ張付候、依之町家商人共杯は甚恐怖驚入、為用意ト本願寺近辺之家々、不殘家財等を田舎向縁類之運出シ、甚以不靜謐之事而已ニ御座候、此上如何之變事涌出候事哉難計、少之間も油断難成事而已ニ御座候、此段御咄申上候、右春嶽様世風甚以不宜候間、如何之事哉と其子細種々外々ニおゐて探索仕候処、全惡説之由ニ御座候、当節之舉ニ乗し、国中之奸賊等之所業ニて張紙杯いたし、町家商人向杯ヲ騒し候事ニ御座候由、段々探索之上相分り申事ニ御座候、全春嶽様首尾之処虚説ニ御座候事故、此段御咄申上候事、春嶽様ニは、江戸表ニおゐて御懐之義ト承居候、左候ハ、京師町家等本願寺杯御飯留ニ相成候筈も無之事、実定ニ御座候是等之処御判賢被下候事

將又、攘夷之儀は、先七月中旬中川宮様より禁中へ御願出之趣は、先軍卒ヲ招キ、自ラ先鋒之御覚悟御歎願ニ御座候、是全弘攘も因循ニも相成候事故、不得止処義ト恐察仕居候、乍去雲客・官方ニは、秀名之御方々有之、英雄・豪傑采配之官將は、中川宮ニ超過致ス者不可有之、卑陋之銘々感服罷在候、全世風流言シ、彼宮先鋒之御歎願ト伝聞仕、無覚束存罷在候処、船印緋羅紗、上リ方ニ菊之御紋付、海上安全ト認候御詠物有之、且又禁中へ御歎願書等一覽仕候事、実説ニ有之、依之弥御先鋒御許容之節は、卑匹之銘々供奉シ申度候間、此宮様之風説急度赤心ニ相基キ、願書差出供奉之処願立候事も有之候、何れか否哉御採用ニも相成候上は、東下仕候間、書記御咄申上候事、外ニ種々之細談も御座候得共、粗申上度候

右之通、京師之形勢惡説之事共、御咄申上候、全以天下ニ姦賊之大萃仕候事故、豈然として不靜謐、可惡事ニ御座候

京都当節之形勢（近藤勇書状写／文久3年（1863年）8月頃） 日野市所蔵

課題③「松原忠司」

第十三回書展の「土方歳三」以来「近藤勇」「沖田総司」「永倉新八」「斎藤一」と続いてきた新選組人名シリーズの第六弾は、新選組四番隊長などをつとめた松原忠司です。

松原忠司は播磨国（現兵庫県）小野藩士の家に生まれ、その後大坂（大阪）で柔術道場を開いていたとされています。浪士組には文久3年（1863年）5月頃に入隊し、池田屋事件などで活躍、坊主頭の巨漢で薙刀を得物にしたことから「今弁慶」というあだ名があったといわれます。新選組四番隊長、柔術師範などを務めました。が、慶応元年（1865年）9月死去。病死とされますがその死には謎が多く、「密かに愛人を囲っていたのが発覚し、土方に咎められて切腹、一命をとりとめるも、その後傷が悪化して死去した」とも、「その愛人と心中した」ともいわれています。

課題④「条約」

前回の「黒船」から始まった幕末用語シリーズの第三弾は、「条約」です。

黒船の武力を背景に開国を要求された江戸幕府は、嘉永6年（1854年）にアメリカ等5か国との間に和親条約を結んだのに続き、4年後の安政6年（1858年）には修好通商条約を結んで貿易が始まりました。しかしこれらの条約を幕府が朝廷の許しを得ずに結んだため、幕府は天皇を軽視したと捉えた人々により、反幕府の動きが高まりました。これに対し、幕府の責任者だった大老・井伊直弼は反対派を厳しく弾圧（安政の大獄）しましたが、桜田門外の変で暗殺され、幕府の権威は大きく低下しました。